仙台北三番丁教会
2023年4月16日 復活後第1主日礼拝説教

祝福してくださるまでは

牧師　齋藤　篤

聖書 創世記32章23～32節
23その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。
24皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、25ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明け
までヤコブと格闘した。26ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格
闘をしているうちに腿の関節がはずれた。27「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言った
が、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」28「お前の名は何というのか」とその
人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、29その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイス
ラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」30「どうか、あなたのお名前を教えてください」と
ヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。31ヤコブは、
「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と
名付けた。
32ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。

『聖書 新共同訳』

「足を引っ張る」という言葉があります。他人の成功や前進を陰でひきとめ、邪魔をする。また、物事全体の進行のさまたげとなると言ったような意味で用いられます。決して良い意味で用いられることがない。この言葉を聞いて、できればそういう人間にはなりたくないと思わせる言葉でしょう。しかし、「足を引っ張る」ということが由来となって名前を付けられた人が、旧約聖書には実際に登場します。それが、本日私たちがいただいた聖書箇所に登場する「ヤコブ」なのです。

余談になりますが、私がかつて生活していたドイツでは、苗字というものがいろいろなイメージを与えてくれます。例えば、農家という意味のバウアーさん、鍛冶屋という意味のシュミットさん、製粉業を意味するミュラーさんなど、おそらくご先祖様がそういう職業だったのだなと想像できるわけです。それだけではありません。クラインは「小さい」という意味のドイツ語、「大頭」を意味するグロースコプフというドイツ語、「太った男」という意味のディックマンなど、それらはすべてドイツで実際に存在する苗字です。どんな気持ちでそのご先祖様は名付けられたのだろうかと、ついつい考えてしまうのです。

そんなことを思えば、「足を引っ張る」ことにちなんで、ヤコブという名前を付けられた当人は、どのような気持ちで自分の人生を過ごしたのでしょうか。それはおそらく、このヤコブという名前が、彼自身の人生を少なからずつくりあげたのではないか。そう思えてならないのです。

ヤコブは母リベカのお腹のなかから生まれたときに、双子の兄であるエサウのかかとをつかんで生まれました。その時の様子が、創世記25章に記されています。

> 創世記25章24～26節
> 月が満ちて出産の時が来ると、胎内にはまさしく双子がいた。先に出てきた子は赤くて、全身が毛皮の衣のようであったので、エサウと名付けた。その後で弟が出てきたが、その手がエサウのかかと（アケブ）をつかんでいたので、ヤコブと名付けた。

この時の出来事によって、ヤコブという名前が付けられました。ヤコブは双子の兄エサウとともに生まれた時に、兄のかかとをつかんで生まれてきました。かかとを意味する旧約聖書原語のヘブライ語「アケブ」から、ヤコブという名前になったのです。彼はかかとをつかむ者、つまり「足を引っ張る者」として、その時のエピソードが、名前を呼ばれるたびに本人はもとより、人々のあいだで思い起こされたことでしょう。

そして、ヤコブにおける人生の前半部分は、まさに双子の兄であるヤコブの足を引っ張ることを、まるで人生の目的とするかのように、それを行い続けたことが聖書に記されています。赤い豆の煮物と引き換えに長子の権利を奪い取ることに成功したヤコブ、母親であるリベカと結託して、父イサクをだまして完璧なまでに相続権と祝福を獲得したヤコブ。彼の行動の数々は、結果として本来兄が得るべきものであったものを自分のものとする生き方をした。それがヤコブでした。

しかし、ヤコブにも言い分というものがありました。それは「自分は神からお墨付きをいただいている」という強い自覚でした。その自覚は、おそらく母親のリベカによって常日頃から聞かされていたことで、彼のなかで育み続けていたのでしょう。神は、双子のこどもをリベカの胎内に宿すときに、このようなことを彼女に告げていたのでした。

> 創世記２５章２１～２３節
> イサクは、妻に子供ができなかったので、妻のために主に祈った。その祈りは主に聞き入れられ、妻リベカは身ごもった。ところが、胎内で子供たちが押し合うので、リベカは、「これでは、わたしはどうなるのでしょう」と言って、主の御心を尋ねるために出かけた。主は彼女に言われた。「二つの国民があなたの胎内に宿っており、二つの民があなたの腹の内で分かれ争っている。一つの民が他の民より強くなり、兄が弟に仕えるようになる。」

この「兄が弟に仕えるようになる」という言葉こそ、その後のリベカに、そして双子の弟として生まれたヤコブの人生に大きな影響を与え、ヤコブの行動を通して、兄エサウの人生までもヤコブにその足をつかまれ、振り回されることになりました。

しかし、これが神の御心であると確信し、ヤコブが行ったことは一見すると成功したように見えながらも、ことごとく「裏目」に出てしまう。それがヤコブの経験だったのです。ヤコブが父イサクをだまして祝福を受け取ったときに、双子の兄であるエサウから大きな憎しみを買うことになります。殺意の念をヤコブはかぶらなければならなくなりました。そして、彼はふるさとを離れなければならなかった。そして、自分の伯父にあたるラバンの家で生活するようになるものの、その生活はなかなか自分の思うようにはいきません。妻のこと、家族のこと、家畜や財産のことなど、ヤコブは知恵と工夫をもって豊かになれば、そのたびに障害が彼の前に立ちはだかりました。

ここに、私たちは「神の御心」とは一体なんなのかということについて、思いを寄せてみたいのです。私たちは、神に祈り、聖書の言葉に聴いて、神から与えられるメッセージというものを感じ取って「これぞ神の御心だ！」と受け取ることもあるでしょうし、神の御心がどこにあるのかなかなか見つけ出すことができないままに、悶々としながら過ごすことだってあると思うのです。今、北三教会は無牧という時を過ごさなければならない。そんななかで、私たちは思うのです。「神は無牧という時を通して、どんな御心を私たちに授けようとしているのだろうか」と。また、「これから、どのような牧師を迎えることが、神の御心なのだろうか」と、私たちは考えるのだと思うのです。

しかし、私たちが考える「神の御心」というものは、決して１００％であるとは言えないということを、私たちは常に意識していることはとても大切なのです。たとえ聖書の言葉に基づいていても、一生懸命祈った結果導き出されたものであったとしても、私たち人間の判断は、絶対に神の示される御心に勝ることはありません。もちろん、結果として神の御心に限りなく近い場合はあるでしょう。９５％かもしれないし、９０％、８

0%、思いっきり外れている場合もあるでしょう。しかし、これだけは言えます。神の御心を完璧に私たちが理解して、確信し、それを自分の人生に反映させることは絶対に無理なのです。必ず欠けやほころびというものが存在します。

リベカがかつて神から聴いた言葉、そしてそのことをヤコブに伝え、ヤコブが受け取った確信。彼らはそれを「神の御心」と受け取って、自分に与えられた状況と知恵をフル活用して、その御心を実現しようとしました。しかし、それは明らかに「やりすぎ」だったのです。ヤコブが陥ったのは、神の御心を果たそうと、自分自身の力に頼り過ぎてしまったことだったのです。神の働かれるスペースというものを彼は中心に据えることができなかった。だから、人間的なやり方を神の御心とつなぎあわせてしまいました。神に背を向けること、いわゆる人間の「罪」とは「やりすぎる姿」のことである。かつて北三教会で担任教師を務めていた川上直哉牧師はそのように解説していますが、それはヤコブのそれに相通じるのではないか。そう思えてならないのです。

しかし、そのような人生を送ってきたヤコブに転機が訪れます。ヤコブが夜な夜な「何者か」とがっぷり四つを組んで格闘したときの様子が、本日いただいた聖書箇所に示されています。私たちは、格闘した者とヤコブとの間で交わされた会話に注目することができます。創世記32章28節から30節をお読みします。

> 28「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、29その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」30「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。

ここでヤコブは、闘った相手から「イスラエル」という名前をもって、のちの人生を歩むように示されました。イスラエル。その名には「神は闘う」という意味がありました。ひと晩じゅうヤコブが闘った相手は、神御自身だったのです。神はヤコブに言われます。「お前は神と人と闘って勝った」と。ヤコブが闘った相手に名を聞いても神は答えませんでした。しかし、彼をその場で祝福したのです。

ヤコブは闘うことで、神としっかり向き合うことができました。神と向き合うことで、ヤコブは自分自身の姿と向き合うことができたのです。自分自身が神とともに歩んでいるだろうか、神の御心を自分の心として歩んでいるだろうか。ヤボクの渡しで繰り広げられた神との闘いは、そんな自分自身に向き合うという闘いでもあったのです。そして、彼は気付かされます。自分自身の力でどうにかするのではなく、神としっかり向き合うことで、新たな人生を歩むことが神によって与えられるのだと。ただ、神の助けによってのみ、これから人生における祝福が待ち受けているのだと。

だからこそ、ヤコブは「祝福してくださるまでは」、絶対にその手を離すことなく闘い、神という闘いの相手に向き合い続けました。神と向き合うことで生じる、自分自身との向き合い。そして、自分自身を見つめることで気づかされる神の助け。これがヤコブ改めイスラエルの「復活体験」だったのです。いみじくもこの時、ヤコブは兄エサウとの再会へ向かう途中でした。エサウからの怒りを買い続けているのではないか。再会と和解への道を目指すヤコブにとって、それは大きな恐れを生むものであったに違いありませんでした。

しかし、昔のヤコブとは違います。彼は自分自身の工夫や知恵「だけ」に頼ることからは解放されていたことでしょう。神としっかり向き合うことで、彼はこれから待ち受けることになる出来事を受け止め、抱えきれない自分自身をすべてご存知である神に、すべてを委ねてエサウのもとを訪ねることができたのです。そして数十年ぶりに、兄弟の再会をわだかまりなく果たすことができた。これは、ヤコブの力だけでは決してなしえないことでした。まさに、神の御心が御心のままにヤコブに働いたのです。

神の御心が御心のままに働くことを、私たちは大切にしたいのです。もちろん、私たちが神の御心と信じて進み行くことは必要ですし、それが無ければ信仰生活を営むことも、教会が前に進んでいくことも難しいで

しょう。しかし、こう考えたいのです。神の御心を推し進める主人公は、私たちではなく神ご本人であるということをです。だから私たちは、自分の心で神の御心と信じて日々を営んだとしても、どんなに確信に満ちていたとしても、神と向き合うこと、常に神の御言葉に聴き、問い尋ねながら祈り続けていく営みを大切にしたいのです。そういうスペースを私たちが積極的に確保するところには、必ず神が私たちに対して、ご自分と向き合うことの幸いを与えてくださるのだと。そのことに希望を持ちつつ、与えられた新しい日々を歩んでまいりたいと願います。

祈り
私たちに代わって闘い、また私たちと向き合ってくださることで、私たちにご自分の御心を示してくださる神よ。私たちはあなたの御心を問い尋ねます。神の御言葉に聴きながら、あなたに祈りながら、あなたに向き合い続けることの大切さと幸いを教えてください。そして、新たな日々を復活の希望をもって歩む者とならせてください。
復活の主にして命の救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン。